

陳舜臣さんを語る会通信

NO.118 Jun. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

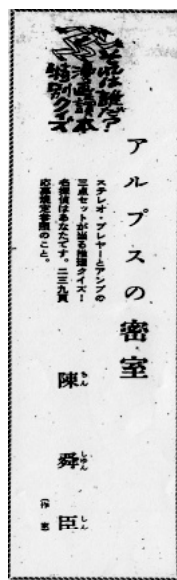
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年6月10日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

短編集未収録27作を順次紹介いたします/第2回4作、その1「アルプスの密室」

短編集未収録27作を、前号（No.117）から順次、詳しく紹介しています。本号はその第2回です。前号に続き、初出年の古い順で4作取り上げました。「アルプスの密室」と「宿縁」については、『宝石』1963年9月号、陳舜臣特集の「自作を語る」にコメントがありますので、それも併せて載せました。（編集委員 橘雄三）



「アルプスの密室」は『漫画読本』一九六三年3月号掲載。カットが二つ入って六ページ弱の短編です。

自作を語る

懸賞つき、犯人あて。そのつもりで、
氣がるに書いた。

舞台・登場人物及びあらすじ

「舞台・登場人物」

日本アルプスの山々を目のあたりにする信州のK村。村の後ろにY山がせまっている。

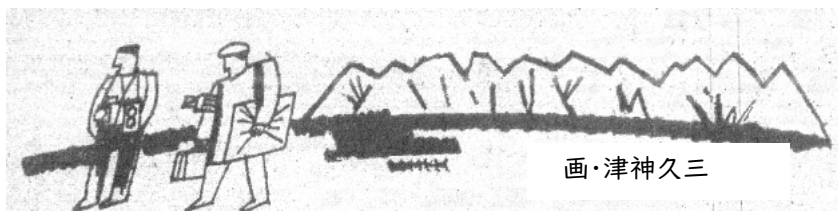
●ぼく 「取材のため信州をうろついていたとき、ぼくはふと石田君を思い出して、見舞いに行く気になった」

●石田茂雄 27歳。学生時代山岳部員。N商事会社に勤めて三年目にノイローゼになり、一と月ほど前から信州のK村で療養中。かつて、消防団の資材置き場だった村はずれの一軒家で、「自炊しながら残忍なノイローゼ軍と戦っていた」

●河本 カメラマン。

●大池 画家。

二人とも、一軒しかないK村の旅館に、一週間ほどまえから宿泊している。二人に接点はなさそう。



画・津神久三

「あらすじ」

ぼくと石田の会話。

「で、いつ東京へ戻るの？」

「まだ帰らない。東京はこわい。ぼくの命が危いからね。ぼくは命を狙われているんだ。」

うちの会社には不正がある。ぼくは正義派だから、それに辛抱できないんだ。ぼくはその不正の裏をしらべてみた。すると、某官庁の高官と汚職でつながっているじゃないか。...

最後に一ヶ月以内に不正を中止しないと、ほんとうに告発すると宣言したんだ。ノイローゼになって、こんな所へ来ててもぼくの宣言はまだ生きています。約束の期日は目前にせまっている...

連中は殺し屋をやと
いかねない。...。げんにいま、(K村に)二人来ている。どちらかが殺し屋かもしれない」

ぼくは(石田に)憐憫の情をもよおした。被害妄想症の兆候である。
ところが、ぼくが石田を見舞った次の朝、石田は死体で発見された。

補足及び解決編

「アルプスの密室」は掲載誌『漫画読本』の特別クイズ作品です。犯人を推理し応募すると正解者の中から賞品が当たる。翌月号に「解決編」と当選者の発表があります。

■「アルプスの密室」解決編

犯人はガラス切りで小穴をあけ、そこから射ちよったわけや。石田君は夕食の支度中で、その音に気づかなんたらしい。射殺後、犯人は悠々とガラスをはずして侵入し、石田君の手にピストルを握らせたんや。射撃距離なんかすぐわかるのに、アホなやつちゃ。外に出てから用意した別のガラスをはめこむ。絵心があつたさかい、例のシミもはじめから描きこんでた。前もって偵察してたけど、ガラスの歪みまでは気づかなんだ。ぼくがあとで行った時、ガラス越しのY山の線が前の日みたいに歪まんたさかい、別のガラスやとわかったわけや。なんで大池の名をあげたやて？ ガラスをはこぶにはキャンパスにくつつけるが一番やないか。まさかカメラのなかにはいらんやろ。それにカメラマンは石田君の左利きも右手の負傷も知ってたはずやし...

右の解決篇の記述から逆に、部屋の様子はどうだったか、どのようにな犯行が行なわれたかを推察して下さい。



短編集未収録作品紹介/第2回4作、その2「宿縁」

宿縁

陳 舜 臣
市川 禎 男・画

「宿縁」は、『宝石』の一九六三年五月号に掲載されました。大きな挿絵が三つ入って十八ページの短編です。殺人事件は起きない。

自作を語る

セイヤーズの鳴鐘術のむこうを張って、梵鐘にかんするウンチクを傾けようと欲したがそれだけは思いとどまった。ペダントリーの臭さは、宇宙をとぶロケットの数かふえるにしたがつて、いよいよ鼻もちならなくなってくる。ヴァン・ダインの死屍に鞭うたれている。こちらは生き身だから、痛いのはご免だ。

「自作を語る」は抽象的で分かりにくい文章です。少し補足します。

■セイヤーズイギリスの女性推理作家。ヴァン・ダインアメリカの推理作家。ペダントリー「知ったかぶり」。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

【舞台】

舞台は神戸。暴力団広田組の事務所兼親分の居宅は神戸市葺合区の三宮寄りにあった。また、登場人物が阪急電車で出会ったりする。

【時代背景】

月刊誌の一九六三年五月号に掲載されましたが、作中時間もその頃です。登場人物が、「あれから十七年か…」と戦時を回想する場面とも符号します。

【登場人物】

●小野進助 四十男、高校教師。妻を亡くして三年。戦時、大卒で入隊、少尉で小隊長を経験。

●田原伸子 30歳。純真、天真爛漫で飾り気がない。小野進助と婚約する。叔父の広田貫造は暴力団の親分。

●堀田 軍隊時代、小野小隊長の部下の一等兵。除隊後、半年ほどすると気が狂い、現在、姫路の奥の精神病院に入院中。

●広田貫造 阪神間では名の知れた暴力団、広田組の親分。組と組員の将来を考え、組の解散を考えている。

●西川 広田組の組員。

【あらすじ】

一と月ほど前、小野は堀田が精神病院に入院していることを知った。除隊後に気が狂ったと言うが、軍隊時代からその兆候はあって、小野にとって、当時、堀田の存在そのものが「じつに重い心の負担だった」。それでも、入院中の堀田の消息を知りたいま、「小野は堀田一等兵に会いたかった。なぜなら、堀田は小野の青春時代の何頁かを、真っ黒に塗りつぶした男だったからである」。小野は精神病院を訪れ昔の部下に面会した。堀田一等兵は、すでに昔の小隊長が識別できなくなっていた。

小野進助は婚約後、伸子の叔父に、新居探しなど頼み事があって何度か広田組の事務所を訪ねることになるが、組員のなかに、おそろしいほど堀田一等兵の人間像に似た男、似すぎている男、西川を発見する。小野は、広田親分を見える西川の目つきに身ぶるいする。

ある日、小野は阪急電車の中で西川に出会う。

小野との葛藤が最高潮に達したころの堀田そっくりなのだ。堀田一等兵が西川のうえにびったりと重なって、すこしのスキマもない。…小野のほうから声をかけたのは、どういうことだろう？ 催眠術にかかったような工合であった。「広田の親分は旅に出たんやってね？」

「でも、もう帰ってくるころじゃないですか」「永久に帰ってこんやろ。もう死んどるんや。死んだ人間が帰ってこれるか」「殺された？ 誰に？」

「このおれに、や」小野は西川に誘われるままに次の駅で降り、山へ入り、無住の荒れ寺に到る。そこには、釣鐘が地面に落ちて

いる鐘楼があった。西川は、ここで親分に殺されかけたが逃げだし、逆に、事務所の金庫に親分を閉じこめたと言うが…。

一週間ほどして、西川が精神病院に入れられたという話が伝わった。

病院は、姫路の奥というから、堀田一等兵がはいっている所であろう。二人は病院のなかで、ときどき顔を合わせるかもしれない。



組事務所へ挨拶に出向いた小野と伸子。広田の背には大きな金庫

短編集未収録作品紹介/第2回4作、その3「怪物も死ぬ」



「怪物も死ぬ」は『世代⁶³』に掲載されました。一九六三年九月の刊行です。挿絵が二つ入って十一ページの短編です。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

〔舞台〕 舞台は東京。

最近、竹内氏は偶然この「三砲台」に、銀座のまん中で出会った。

「おや、「三砲台」じゃないか。いつ日本へ来たんだ？」 「五年まえからですよ」

〔時代背景〕

掲載誌の発行は一九六三年九月ですが、作中時間もその頃です。作中、登場人物「三砲台」が「むかしの商売はとくにやめました。もう二十年以上になりますよ」と言っている。「昔の商売」とは、戦時中に行っていた「暗殺業」のことなので、これとも符合します。

〔登場人物〕

●石丸 週刊T誌記者。

●竹内 戦時中、特務機関にいた。石丸の知人。

●王愛恵 マラヤの華僑の娘。日本留学中の薬大生。石丸の従妹の友人。

●田啓光 60歳をすぎた痩せぎすの中国人。かつて、名人肌の人殺し職人だった。通称は「三砲台」。五年前から東京に住み、友人のやっている料理屋の顧問をしている。

●牧野 石丸の中学時代の同級生。薬品会社の技師。東南アジア視察中にバンコックから手紙を寄越す。

〔あらすじ〕

週刊T誌に『怪物列伝』連載時、担当記者であった石丸は、竹内氏の紹介で田啓光に取材を申し込み断られたことがある。それから半年、田啓光の「死んだあとなら記事にしかまわない」という言葉で取材が実現し、従妹の友人、王愛恵と彼のアパートを訪れる。

田啓光の話を聞き、

石丸は、ある点で心をうたれた。それは、田啓光が自分の仕事にたいして抱いている愛情である。日蔭ものであった己の仕事に、いつか陽をあててやりたいと願う心情は、仕事をもつ石丸にはわかる気がした。

「わしが死んだら発表してもいい。いや、こちらからお願ひして、公表してほしいくらいじゃよ。…。わしの仕事が後世にのこらんとすると、無念やる方ない思いがする。司馬遷だって、史記に刺客列伝を書いとるじゃないか」

ここで、司馬遷の刺客列伝についての陳舜臣さんの蘊蓄が語られる。自家薬籠中の物といえます。

帰りみち、王愛恵はしきりに憤慨した。

田啓光のやったことは、

「仕事じゃなくて、犯罪ですわ。…史記の刺客伝をひき合いに出すなんて、なにごとです。司馬遷が刺客列伝にのせたのは、みんな信念をもつ

た人たちですわ。あの田啓光に、彼らと肩をならべる資格なんて、ぜったいありません。北洋軍閥から金をもらうと広州の革命家を殺し、広州の依頼で北洋軍閥の將軍を殺すなんて、まるで一片の節操もないじゃありませんか。外国の依頼にも応じています」

つぎに田啓光は、やはり上海の資本家に頼まれて、王滋という大学教授を暗殺した話をした。王教授は無産運動の理論的支柱で、資産階級にとっては大敵だったのだ。

「やはり毒殺じゃが、…。教授は北京の安宿に泊まっておったが、わしは相手の不在中に忍びこんで、毒を塗ったトゲを置いてきたのじゃ。あの男がかならず強い力でさわる場所にな。…。電気スタンドのスイッチのところじゃよ」

取材は3回に及んだ。3回目の翌日、石丸は、田啓光の部屋に手帳を忘れてきたと言う王愛恵と田のアパートへ。そこで、二人が見たのは、田啓光の冷たくなった死体であった。

解剖の結果、死因は毒薬で、死体の背中に小さな傷があった。そこから毒針様のものをうちこまれたらしい。

田啓光に最後に会ったのが石丸と王愛恵であり、石丸は自分が犯人でないことを知っている。二引く一は一であって、犯人は王愛恵ではなからうか？

しかし、石丸は、動機がわからなかった。

田啓光の死から一年たった。

石丸は、バンコックから届いた牧野の手紙をみて、すべての謎が解けた。

王愛恵は、王滋教授の娘だったのだ。

短編集未収録作品紹介/第2回4作、その4「社長はおびえた」

社長はおびえた

陳 舜 臣
長尾みのる・画

「社長はおびえた」は、『宝石』の一九六四年3月号に掲載されました。挿絵が四つ入って二十ページの短編です。

舞台、時代背景、登場人物及びあらすじ

【舞台】

「神戸港には霧がかかって、かすんでいた。沖に停泊している船が、輪郭しかみえない。いつのまに降りはじめたのか、ほそい雨あしが、ところどころでかすかに白く光る」、きれいな描写です。登場人物、栗田秀三の会社、太平洋商會は税関の近くにあり、かれの邸宅は青谷にあります。生田警察署なども出てきます。

【時代背景】

この作品は月刊誌の一九六四年3月号に掲載ですから作中時間もその頃でしょう。目尻に痣のある男、張発福が、終戦数年前の出来事を二十年前と言っているが、それとも符合します。

【登場人物】

●栗田秀三 50歳。太平洋商會社長。妻と青谷の居宅で暮す。息子は東京で大学生活をおくる。

【経歴】商業学校を出て、H貿易に勤務。戦中は軍の御用商人として、南方へ行っている。終戦の前年に帰国。戦後闇商売で儲け、のち東京で貿易をはじめたが、これは失敗。昭和30年、中京物産創立のとき、出資して重役となり、名古屋に移る。34年暮に退社し、翌年7月に神戸で太平洋商會をつくって、自ら社長となる。

●平松 太平洋商會輸入係。

●沢井甚太郎 栗田社長の腹心！？平松の同僚。

●住谷隆子 太平洋商會社長秘書。

●砂島少年 太平洋商會給仕。

●目尻に痣の男 張発福。英国籍の華僑。戦中、日本軍占領時代のペナンで栗田から全財産をまきあげられる。

●小岩 栗田は名古屋時代、中京物産本来の業務ではない個人的取引で、悪辣な手段を弄してある商店主を没落させたい。商店主は栗田に、「いつかきつと、恨みをはらしてやる」と手紙で復讐を宣言したとか。沢井は、その男が小岩だというのが…。

●竹森 兵庫県警警部。

【あらすじ】

社長の栗田秀三は、会社の仕事以外の個人的取引で、よく沢井をつかった。ロボット役にはうってつけと見こんだのであろう。栗田自身の名をもち出してはまずいときは、沢井の名義を用いることがしばしばあった。

土地の登記証なども、沢井の名義にして、それを抵当のかたちで栗田が所有する方法も採られた。そんなとき、登記証をもって社長の家へ行く道すがら、

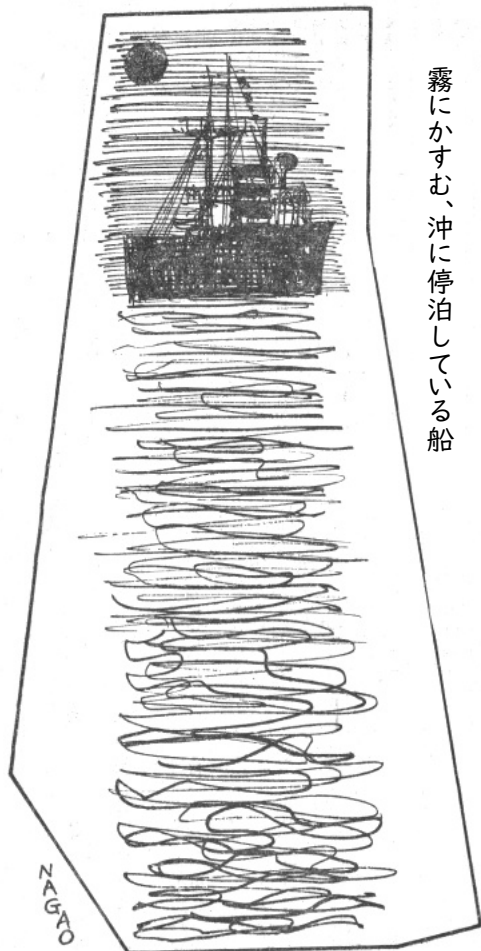
沢井はよくぼんやりと考えたものだ。

「これが、ほんとうにおれのものだったらなア…」

ときには行きすぎの空想もしたものだ。

「社長がいま心臓麻痺で倒れたら、この土地はおれのものに

霧にかすむ、沖に停泊している船



なる。…

社長が急死すれば。―という空想は、くりかえしているうちに、沢井の意識の下で、かなり輪郭が濃くなっていた。

税関から社への帰途、（平松の）先を歩く社長の栗田が急に足を止めた。

あまり急なので、平松は社長にあわせて足をとめることができなかつた。社長の斜め横まで出てから、やっと、とまったのである。平松は思わず、社長の横顔を見た。それは、平松がかつて見たことのない表情をあらわしていた。眉をしかめている。いつもとはちがう。

「おびえている！」

「では、なににおびえたのか？」

社長の前を横切った一人の男がいた。…目尻のところに赤い痣が、はっきりと見えた。十円玉よりも大きな、ほとんどまんまるな形の痣である。

この話を社の同僚の平松から聞いた時から、沢井の、栗田社長殺害計画は現実化する。